

には、我今迄の武勇、ことごとく、いたすらごとになりぬべし、百會は中風の神灸なれば、當分其病をふせぎて、こゝろよく自害すべきとのため也とて、灸を灸すまして、腹切りしと也。

〔常山紀談〕四勝頼田武長篠敗北の後、蘆田常陸介信蕃クシダ二股の城を守る、三河の軍、五月三年〇天正下旬

より此を攻むる略。中、信蕃固く守りて、十一月に至りて、城をわたし、甲州に引入べしと、勝頼再三

下知せらるれども、聞入す、勝頼自筆の書をもて、下知せられしかば、十二月下旬に、人質を出し、廿

三日に城を渡さんと約せしが、雨ふりければ、蓑笠にて見苦く候とて、翌廿六日、天晴て後城をわ

たし、二股の川の邊にて、人質をとりかへ引とれり、

〔備前老人物語〕一信長公、手の爪を取給ひしを、小姓とりあつめけるが、とかくたづねもとむる體

なれば、何をたづぬるぞと問給ひしに、御爪ひとつたらざるよしを申す、御袖をはらはせ給ひけ

れば、爪ひとつ落たり、信長公御感ありて、物毎にかくこそ念を入べき事なれとて、御褒美ありけ

り、

〔鹽尻四十一〕森蘭丸は、信長の寵童也、或日、との居給ふ處の葎を卸すべきよしの給ひしに、蘭丸竹

の枝を以て、先葎の上を試るに、茶碗に水を入たるがありしを、物をふまへて、靜にとりて、葎を卸

せし、其心つきなくば、耻がましき目をこそ見るべきに、かく物せし事、神妙也と宣ひしと云々、是

は信長、彼が毎に心を鎮めて、思慮あるを様し給はんとて、かく兼て水碗を置れしとなり、

〔常山紀談〕十朝鮮にて、清正藤〇加、全州に在る時、清正を太閤呼れしかば、日本に歸るとて、打立れけ

り、戸田民部少輔、高政、密隅に有て、清正と舊友なれば、もてなすべき用意して待れしが、略〇中、程な

く、清正著陣せられ、屏重門より入、椽にて民部近習の士二人寄て、清正のさ、れし馬蘭を取て、旗

籠に立る、清正椽に上らるれば、よりて草鞋の紐を解、脚當の緒を解く時、清正腰に付たる緋曇子

の袋を、座敷へ投入たるに、どうと落る、米三升計に、味噌、銀錢三百文入れられたり、馬印をさすに